

Marshall Library of Economics

服 部 容 教^{*}

Marshall Library of Economics の Librarian をしている Piero Sraffa 氏から文部省の在外研究員として私を受け入れるという旨の招聘状を昨年受けとり今年の3月の末まで、ケンブリッジ大学で研究に従事することができたが、イギリスに滞在中に私がとくに利用した図書館といえば、ロンドンにある British Museum、ケンブリッジ大学の University Library、それに上の Marshall Library of Economics の三館位であらうか。

ところで、British Museum については余りにも有名であり、しかも色々な方面から報告もなされているように思うので、今さらここに新たに書くようなこともないように思われる。また Cambridge の University Library については、すでに本誌 (No. 6) で、大阪府立大学の西村孝夫教授の報告がなされているので、ここでは Marshall Library について、私が利用したさいの感想なりを記しておきたいと思っている。

Marshall Library of Economics はいうまでもなくイギリスの経済学におけるケンブリッジ学派のいわば創設者である Alfred Marshall (1842-1924) を記念して設立された図書館である。

この図書館は 1925 年に正式に設立されたようであるけれども、この図書館設立の基礎はかなり古くになされており、Marshall 夫妻がそれに努力したことはよく知られている。Marshall 夫妻は Cambridge に来てしばらくは Magdalene College の近くの Chesterton Lane に住んでいたようであるが、すぐに Madingley Road の Balliol Croft に移り、そこに永住することになった。この Balliol Croft では、毎学期、学生に月曜日と木曜日の4時から7時まで非公式の指導をおこない、Marshall の蔵書を学生に貸し与えるというようなことがおこなわれた。この Balliol Croft に設置された学生のための図書室が現在の Marshall Library の基礎になっており、カタログの作成等には Marshall 夫人が尽力した。ところでこの図書館の Librarian には現在の Piero Sraffa 氏に至るまで Marshall 夫人の Mary Paley Marshall, Dennis Robertson, Ryle Fay 等の経済学者がなっており、多くの経済

* はっとり よしたか 大阪府立大学経済学部

学者を今までに育ててきたし、また将来においてもすぐれた経済学者を世に送りつづける役割をはたすであろう。

London から Cambridge に来る観光バスも、あるいは汽車を利用して来る観光客もすべてと言ってよい程、Cambridge の中心となっている King's College, King's Parade, Market Hill には立ち寄る。他方このような Cambridge の中心地である King's College の近くは、ここは買物等の日常生活にも、また大学に出てゆくのに、あるいはバスで Oxford や London に出てゆくのにきわめて便利なところであり、私は、たまたま King's Parade に下宿していたので、この下宿から私の利用することができた二つの図書館へは等距離の、しかも割合に近いところにあって、下宿のすぐ前にある King's College の門をはいると、今日は右にまがって University Library に行こうか、それとも左にまがって King's College をぬけて Marshall Library に行こうかと、King's College の Court に立っている像をながめながらよく躊躇した。門を入れて左に折れ、この Court にそって右にまがるとあとは Cam 川をわたって King's College の裏門まではほぼ真すぐな道がつづいており、Cam 川に面した King's の堤には夏には観光客が腰をおろし、また秋頃になると学生が大学の講義を受けての帰りであろうか、数冊の本をもってそこに寝そべっている。また Cam 川では学生たちが punt と呼ばれる舟をこいでいて、これをみると彼等が Cambridge の学生生活の一面を enjoy している様子に接することができる。King's の裏門を出るとそこには Cam 川と平行している Queen's Road があり、これを横切って真すぐ西に West Road を歩いて行くと右側に University Library の大きな建物が見え出してくる。この West Road から University Library と Marshall Library はほぼ等距離にある。この West Road を右にまがれば University Library へ、左にまがると Marshall Library に行くことができる。さてこの道を左に、つまり南に入ると真正面に文科系の講義室、研究室等が集められている建物があり、それが四辺形になっていてその一辺を経済学部の校舎と Marshall Library とが二等分しているようなかっこうになっている。この建物の2階と3階が Marshall Library になっていて階段を上がるとカウンターがあってそこにかばん等を預けて愈々図書館の机に向う。

この図書館の Finkel 氏に最初会ったとき、新学期がはじまるとこの図書室も満員になるからできるだけ早く出て来た方が机も確保できてよいと言われたので、新学期に入った 10 月頃からはかなり早く出かけたが、座るところがないような日はあまりなかったので、夕方から出かけて行っては、夜遅くまで利用したこともあった。ここの開館時間は、休暇の期間をのぞいて、月曜から金曜までは午前9時から午後10時までで、土曜は午前9時から午後7時までだったので、ほぼどんな時間に

でも利用できるので Pub でビールをのんでからぶらぶらと出かけたこともあるほど、きわめて利用しやすい図書館であった。ことに土曜日には University Library が午後1時で閉館になるので昼食後は University Library を出て Marshall Library へ移ることができ、また土曜日はとくに Marshall Library がすいているので好都合であった。

さてこの図書室はその名前からもわかるように経済学を中心とする書物を収集していて、そして主題別にそれぞれ書架がありその中に分類された本がならべられている。この書架の前には6人掛けの机と椅子があって、たとえば理論経済学に興味のある者は何番のところに行けばよいというように、その section から適当に本を選んですぐ読みだすことができる。経済学部では経済学の Tripod を受けようとする学生に参考文献の一覧表を配布しているがここではそのような参考文献はすぐにさがし出すことができる。このようにこの図書館は、Marshall が個人的にかつて学生に貸し与えていた伝統を受けついでいるのであろうか、もっぱら学生用の図書館という感じがする。そのためかあるいは本の回転をよくするためでもあろうか借りることのできる冊数は2冊までで、しかも期間は3日間であり、これ以上の期間にわたって借用してしまうと1日に2ペンスの金を支払わなくてはならない。とはいってもこの図書館からはかなりの冊数の本が「盗難」に会うらしく、この噂をきいたときはケンブリッジの学生にしてこのようなことがと残念で仕方がなかった。余談になるけれども Cambridge の町でも自転車の盗難がかなりあって、auction にはかなりの台数の盗まれた自転車がでると聞いたこともある。そのような状態であるから、自転車を道に置いておく場合など、タイヤの空気をぬいたり、夜間照明の電池をわざわざはずしているような人を見たことがあるが、これだけ用心をしないとすぐなくなるのであろう、Marshall Library も盗難には注意してもらいたいものだ！

図書館に入れば、好きなところで適当な本を読むことができるが、この図書館の蔵書すべてが開架式にはなっていない。Sraffa 氏の秘書をしている Mrs. Lowe さんに会ったとき、経済学の研究に利用するのであればこの Marshall Library が一番よいと言いながら、私を Sraffa 氏の部屋に案内してくれ、古典学派の経済学の書物はこの Sraffa 氏の部屋に分置してあると言って本棚から2、3冊みせてもらったことがある。また Marshall の書簡等についても保存してあり、請求すれば見ることもできるようであるが、余り興味もなかったのととうとう一見することもなくすごしてしまった。

雑誌等については複写をしてもらうことができるが、ここにはゼロックスがなかったもので、私の場合複写はすべて University Library でしてもらった。ところで

この複写については著作権についての認識が徹底しているせいか単行本についてはその全部を複写してくれないのが残念であったけれどもこれは仕方がない。

以上の事以外にも思い出してみるとまだまだ色々な印象があったりして書きたくなるけれどもこの位で終ることにしたい。

経済学の Tripos はそろそろ終了する時期になっていると思うので Marshall Library も今頃はひっそりとしているのであろうか。

リプリント版 新ライン新聞

好評発売中!!



Neue Rheinische Zeitung

Organ der Demokratie

全2巻 ¥135,800

Nr. 1-301. Nachdruck (Köln, 1. Juni 1848-19. Mai 1849). Hrsg. von St. Nauth u. a., In der letzten rotgedruckten Nummer Karl Marx. Redaktion: Karl Marx (Redakteur en Chef), H. Bürgers, E. Dronke, F. Engels, G. Weerth, F. Wolff, W. Wolff. Mit neuerstellten analytischen Inhaltsverzeichnis und Register. ca. 1800 S. 1973.

〈近刊〉

Rheinische Zeitung für Politik, Handel und Gewerbe.

Redaktion G. Höffken, Rutenberg und Karl Marx. 2 Jahrgänge. Köln 1842-43. Mit Einleitung. ca. 2400 S. Nachdruck 1947. Leinen
¥168,000

日本総代理店

極東書店

電話 03(265)7531

営業所

振替東京 100009 大阪・京都・福岡